

2024年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

代表者氏名 高坂 康雅

研究プロジェクトの名称							
大学を中心とした地域の不登校支援ネットワークの構築							
研究目的							
本プロジェクトは、大学を中心として、地域にいる不登校の子ども、不登校の子どもを抱える親・家庭、不登校の子どもの支援を行う者(教師、支援者など)、不登校など困難を抱える子どもの支援を行うことを志望している学生などが相互につながり、不登校に対する情報を集積するとともに、そのような情報を共有し、よりよい支援を行うための連携・協力を行うためのネットワークを構築することを目的とする。なお、本申請プロジェクトにおける「地域」は主に町田市を想定しているが、実際に情報収集・共有及び連携・協力を行う対象の範囲は町田市に限定しない。 具体的には、2017年4月より3か月に1回開催している町田市不登校の親の会「いぐぷらす」を開催し、不登校の子どもをもつ親同士の情報共有やピアサポートの場を提供する。 また、地域において不登校支援を行っている教育支援センターやフリースクール等への訪問及びインタビューを行う。それぞれの特徴や支援内容等をまとめ、不登校の子どもやその保護者が各自が持つニーズに合わせた選択ができるよう、整理する。また、不登校支援を行っている専門家などへのインタビューも行い、現在の不登校支援のあり方や今後の改善方法などについて知見を得る。 さらに、2019年11月に開催した町田市不登校を学ぶ会「いぐあるふぁ」の開催を行う。「いぐあるふぁ」では不登校を経験した大学生や不登校の子どもを抱える親などに実際の体験を語ってもらうとともに、研究代表者などが不登校に関わる知見や情報を提供する場である。2023年度(2024年1月20日(土)開催予定)に久しぶりに開催することが決定しており、2024年度も継続して開催をしていきたいと考える。 2023年度に「まちだ多様な学び場・居場所MAPネットワーク」が立ち上がった。申請者もこのネットワークの中心的なメンバーのひとりとなり、「まちだ多様な学び場・居場所MAP」作成に携わった。2024年度においても当該MAPの改訂・周知等の活動を行い、不登校等で多様な学び場・居場所を求める児童生徒やその保護者に対する情報提供・支援等を行うとともに、ネットワークを通して学び場・居場所のヨコのつながりを深めていく。							
プロジェクト所属メンバー (氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。)							
高坂 康雅	教						

プロジェクトの概要（480字以内）（学内外に向けた分かりやすい表記で記載をお願いします。）

本プロジェクトでは、町田市を中心として不登校の子どもを支援している者（施設・団体等）、不登校の子どもたちの保護者などが連携・協力できるネットワークの構築を目的としています。具体的には、町田市不登校の親の会「いぐぷらす」の開催（2025年度は2回開催）、町田市不登校を学ぶ会「いぐあるふぁ」の開催（2024年度は開催できず）、町田市多様な学び場・居場所MAPネットワークによる「町田市多様な学び場・居場所MAP」の作成・配布（2025年3月配付）などを行っています。また、町田市教育委員会との連絡会に参加している。

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

2024年4月20日（土）：町田市不登校の親の会「いぐぷらす」開催
2024年7月27日（土）：町田市不登校の親の会「いぐぷらす」開催
2024年8月27日（火）：フリースクール等と町田市教育委員会との連絡会参加
2024年9月20日（金）：町田市多様な学び場・居場所MAPネットワーク打ち合わせ
2024年10月9日（水）：町田市教育センター保護者の集い拡大版参加
2024年10月30日（土）：町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ」にて、町田市多様な学び場・居場所MAPネットワークブース出展
2025年2月14日（金）：フリースクール等と町田市教育委員会との連絡会参加
2025年3月29日（土）：町田市多様な学び場・居場所MAPネットワーク会合
2025年3月：2025年度版町田市多様な学び場・居場所MAP配付

研究成果の概要（1000字以内・写真が複数ある場合は、600～800字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

町田市不登校の親の会「いぐぷらす」では、不登校に関する支援が十分ではないこと、支援に関する情報が十分に行き届いていないこと、町田市周辺地域（多摩市、府中市など）では町田市以上に学校以外の支援機関が不足していることなどが語られ、地域の課題が明らかとなった。

町田市教育委員会とフリースクール等との連絡会では、「いぐぷらす」で明らかになった課題を共有するとともに、学びの多様化学校の開設など町田市が行っている不登校施策について説明を受けるとともに、民間が行っている不登校支援について理解を深めた。

町田市多様な学び場・居場所MAPについては、町田市内各所で設置・配布を行っている。支援者・教育関係者にも広まっており、その有益性が確認されているが、継続の方法については検討が求められている。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2022年4月～2023年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

特にありません

2024年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

代表者氏名 小林 猛久

研究プロジェクトの名称

「地域デザイン」を基盤とした、次世代のための異質力育成プログラムの開発

研究目的

和光大学の学生や教職員との連携により地域活性化を実現したいという企業や市民活動団体、各種行政機関との連携プロジェクトの創出とその運営や評価を行うシステムを構築して、組織的かつ継続的に地域活性化を働きかける。

プロジェクト所属メンバー（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）

小林 猛久	教	岩本 陽児	教	堂前 雅史	教	倉方 雅行	共
山田 貢	共	小関 和弘	共				

プロジェクトの概要（480字以内）（学内外に向けた分かりやすい表記で記載をお願いします。）

これまでの8年間の成果として、2015年の共通教養科目「地域デザイン」新設、地域の農業生産法人との連携による社会と教育現場が融合した人材育成システムの構築や地域活性化へ貢献するシステムの構築、地域の特産品である禅寺丸柿を使った果実酒や万福寺人参を使ったエール（発泡酒）といった新商品の開発・生産・販売といった実体験型学習の実現などを行うことにより、学生の学習意欲の向上や地域経済の活性化の有効性を大きく示すとともに、結果的にその経験から地域企業に就職した学生もあり、地域に若者を根付かせる事例ともなった。

このように、事業の成果として地域活性化を実現するためには、地域に若者が定住し経済的に安定した生活を送ることができるシステムが必要となっている。しかし、単独の授業プログラムではその規模に限界があり、地域への影響力もそれほど大きくすることはできない。

そこで、本事業テーマとして設定した「地域デザインを基盤とした、次世代のための異質力育成プログラムの開発」は、和光大学における現代人間学部・表現学部・経済経営学部の全3学部の学びのコアであるとともに本学の強みとなる「異質力で輝く」人材育成の実践的研究をベースとして、地域の多様な人々と連携活動を希望する全学生やあらゆる授業・課外活動と連携が可能となる情報共有を実践してきた。今後も、本学の学生や教職員との連携により地域活性化を実現したいという企業や市民活動団体、各種行政機関との連携プロジェクト創出と運営やその評価を行うシステムを新たに構築して、組織的かつ継続的に地域活性化を働きかけるものである。

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

(1) 和光小学校の活動支援（和光小学校の児童を支援して、各種作業を実施）

- ・ 5月10日 2年生2クラスの小麦の収穫体験
- ・ 6月14日 5年生2クラスの 田植えの運営支援
- ・ 9月27日 5年生2クラスの 稲刈り、はざかけの運営支援
- ・ 10月11日 2年生2クラスのサツマイモ掘りの運営支援
- ・ 10月25日 脱穀
- ・ 12月 6日 和光小学校の収穫祭に参加

(2) おかがみ寺子屋支援事業(川崎市が運営する寺子屋事業の支援(岡上小学校の体験教室)を実施した)

- ・ 7月27日 和光大学コンベンションホールにて、藍のたたき染を開催

(3) 川崎市と企業応援センターかわさきによる障がい者雇用支援サポート

- ・ 6月21日、7月19日、10月4日、11月29日、の金曜日4回実施
- ・ 2月3日（月）本年度のフィードバックと次年度の活動に関する打ち合わせ

参加者：川崎市就労支援課 昌山、企業応援センターかわさき 荒木・中原、山田貢、倉方、小林猛久、企画室岡本

(4) その他の活動

- ・ 6月 8日 岡上グリーンツーリズム「田植え」の運営支援
- ・ 9月28日 岡上グリーンツーリズム「稲刈り、はざかけ」の運営支援
- ・ 12月11日 「川崎市市制100周年を記念したワイン」のボトルラベルデザインの作成を担当した学生たちが、福田紀彦 川崎市長を表敬訪問
- ・ 2月1日 新百合ヶ丘サステイナブルマルシェに参加して、授業の成果物であるスクラブバーム、柿のドライフルーツを販売

研究成果の概要（1000字以内・写真が複数ある場合は、600～800字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

これまでの本研究の取り組みにより、地域産業である農業の6次産業化への貢献、関連産業への学生の就職、履修者の増大などの具体的な成果を残すことができた。特に、JA セレサ川崎 セレサモス麻生店では、2017年7月より岡上エールを常設販売して頂いているが、継続的に売り上げがあり、「和光大学と地域の企業が共同して地元農産品を活用した商品の開発・販売を実現していることは地域経済の活性化に大いに役立つ。今後の量産化や多品種化を待っている」と大きな期待を寄せてくれている。

さらに、本活動の成果を踏まえて、2019年度からスタートした、岡上「てらこや」事業（麻生区の取り組みとして、地元町内会やNP0などが運営主体となって岡上小学校の児童の学習支援や体験活動の実施委を行う事業）の体験活動の支援が活発化し、SDGsをテーマとしたグリーンツーリズムとしての体験教室も根付いてきた。さらに、2022年度から開始した和光小学校（世田谷）の稲作支援を継続しており、6月の田植えから10月の脱穀までの全作業をサポートするという連携を実現し、今後も継続して連携を行う契約を準備中である。また、川崎市と企業応援センターかわさきによる障がい者雇用支援についても本格的な共同作業として、全4回実施し、参加者数のべ20人を超えるなどの実績を残した。岡上エールのラベル切り取り、コメの袋詰めなど、実際に販売される商品の一部を担当する作業に従事することで、「達成感や緊張感を感じた。」「他の企業での実習にも参加してみたいという意欲が生まれた」「学生との共同作業なので安心して取り組めた」などの前向きな感想を多数得ることができた。学生にとっても多様な人々と共同作業することで、人の得手不得手に対応して業務を遂行する難しさや重要性を体験できたことは貴重な学びとなった。

また、本年度の新規事業として、川崎市政100年を記念した岡上で生産したブドウで醸造したワインのラベルを学生がデザインして、川崎市長に承認されるという事業も実施した。本活動は、行政をはじめ多くの市民の方々に好評を得た。

今後も地域の小学生の支援を拡大するとともに、授業を基盤とした地域連携・人材育成プロジェクトを発展させ、全学的なシステムとして構築し、それを恒常化させることは、和光大学の地域貢献として大いに価値ある取り組みとなると考えている。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2022年4月～2023年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

■新百合ヶ丘サステイナブルマルシェでのブース出展



■6月 和光小学校 5年生の田植え支援



■和光小委学校 2 年生の麦刈り支援



2024年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

代表者氏名 菅野 恵

研究プロジェクトの名称							
「地域連携を重視したオレンジリボン運動の展開」							
研究目的							
児童虐待防止啓発のための「オレンジリボン運動」を地域連携に特化して展開することが目的である。							
プロジェクト所属メンバー（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）							
菅野 恵	教						

プロジェクトの概要（480字以内）（学内外に向けた分かりやすい表記で記載をお願いします。）
“研究代表者は、和光大学かんのゼミに所属する大学生と共に、2018年度から児童虐待防止啓発のための「オレンジリボン運動」に取り組み、特に児童虐待相談・通告ダイヤル189」の周知を行ってきた。はじめは大学内の展示室での啓発からスタートしたが、町田市子ども家庭支援課との連携を機に、徐々に地域のイベントに活動を広げることとなった。活動にあたり、児童虐待問題の理解を深めるために、外部の支援者を招き事前学習を行った。なお、本研究は、大学生による児童虐待防止プロジェクトを通じた地域活動をテーマとし、フィールドワーク研究の位置づけで実施した。 主に取り組んできたことは、主に以下の通りである。 事前学習：児童虐待に関連するテーマでの関係機関職員による講演及び児童福祉施設の視察（東京都調布市、神奈川県川崎市）、地域イベントの参加（東京都町田市、神奈川県相模原市）、地域の図書館等での展示（東京都町田市、神奈川県相模原市）、フリースクールの子どもたちとの交流イベント（埼玉県春日部市）”

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

7つの機関の職員による招待講演、児童福祉施設（乳児院、児童養護施設）の視察、地域イベントへのブース出店（「つながりマルシェ」、「まちカフェ!」、「ガクマチEXP0」）、地域の図書館でのPOP展示（東京都町田市鶴川駅前図書館、金森図書館）、地域の公共施設での展示（ユニコムプラザさがみはら）、フリースクールとの交流イベント（松実高等学園初等部）に取り組んできた。リーフレットの配布等で児童虐待相談通告ダイヤル「189」の啓発を行った。経過は以下の通りである。

2024年

8月15日 町田市子ども家庭支援課職員と打ち合わせ
5月16日 町田市まこちゃん教室（ひとり親家庭等の学習支援事業）職員による講演
5月30日 至誠館さくら乳児院（川崎市）の視察、講演、グループワーク
6月13日 児童養護施設調布学園・第二調布学園（調布市）の視察、講演
6月6日 かわさき里親支援センター（川崎市）職員による講演
6月20日 東京都公立小学校教諭、東京都公立学校スクールカウンセラーによる講演
7月19日 松実高等学園初等部（フリースクール／埼玉県春日部市）との交流イベント
8月15日 町田市金森図書館職員との打ち合わせ
8月15日 町田市子ども家庭支援課職員と打ち合わせ
10月2日 町田市鶴川駅前図書館職員と打ち合わせ
10月20日 地域イベント「つながりマルシェ」ブース出店（相模大野駅）
11月5日～12月2日 町田市鶴川駅前図書館POP展示
11月7日～11月28日 ユニコムプラザさがみはら展示
11月12日 町田市子ども家庭支援課職員による講演
11月14日～12月12日 町田市金森図書館POP展示
11月30日 市民協働フェスティバル「まちカフェ!」ブース出店

2025年

2月1日～3月4日 町田市鶴川駅前図書館ブックシェルフ活動報告展示
3月22日 学生活動報告会「ガクマチEXP0」ブース出店

研究成果の概要（1000字以内・写真が複数ある場合は、600～800字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

大学生が地域に密着して活動することで、地域ならではの子育ての課題を知ることになり、地域イベントに出向くことで他団体との交流が生まれた。また、関連団体の職員との打ち合わせや連絡調整を大学生が担当することで、主体的に地域とかかわろうとする意識が高まっている様子が見受けられた。

事前学習では、町田市子ども家庭支援課の職員から町田市の児童虐待相談通告件数の説明など、地域の子育ての課題を把握する機会になった。また、乳児院や児童養護施設の視察を通して、学生が現場の実際に触れることでその後の活動に活かすことができた。小学校教諭やスクールカウンセラーによる講演では、学校現場での子どもの心のケアについて学ぶことができた。

公立図書館に展示したPOPや地域の公共機関に展示する掲示物の制作では、不慣れで時間がかかる者もいたが、手描きにこだわったことで個性的な制作物になり、来場者や協力機関の職員から好評であった。

地域イベントでは、毎年参加している「つながりマルシェ」、「まちカフェ!」、「ガクマチEXPO」にブース出店し、子連れの親子が立ち寄れるように遊べるコーナーを設けた。子どもが遊んでいる合間に、リーフレットを渡しながら保護者へ「オレンジリボン運動」の説明をすることができ、ある程度の啓発をすることができた。

フリースクールの子どもたちとの交流イベントの終わりのほうで、我々の活動について直接案内することができて、小学生、中学生に関心をもってもらえた。

大学生にとって、学外活動として地域に出向くことで授業だけでは得られない学びの機会になった一方で、7年間でさまざまな企画運営に携わることになり、授業時間外での活動になるため時間の制約が生じ負担を感じている大学生もいる。自ら希望して参加している大学生の自主的な活動ではあるものの、持続可能性を重視し、過度な負担にならないための工夫をしながら、さらに地域に貢献できる活動を模索していく必要がある。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2022年4月～2023年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

和光大学現代人間学部紀要第19号に執筆予定である。

■公立図書館のPOP展示



■地域イベントへの参加



■乳児院の視察、グループワーク



■ユニコムプラザさがみはらでの展示



■町田市子ども家庭支援課職員による講演



2024年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

代表者氏名 中村 仁美

研究プロジェクトの名称							
和光大学周辺地域における不登校児童・生徒への芸術体験調査と支援							
研究目的							
本プロジェクトの目的は、和光大学周辺地域における不登校児童・生徒への芸術体験の実態を把握し、不登校支援施設・団体と相談の上、適切な題材の在り方を検討し、ワークショップ等により、希望する子どもたちに芸術体験の機会を確保することである。これらの活動は、子どもの再登校を目的とするのではなく、個々に合った生き方や学び方の一助となる「地域デザイン」の方法を模索するものである。							
プロジェクト所属メンバー（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）							
中村仁美	教						

プロジェクトの概要（480字以内）（学内外に向けた分かりやすい表記で記載をお願いします。）
本プロジェクトは、川崎市における不登校児童・生徒への芸術体験支援の実態調査とワークショップ実践を通じて、地域における新たな学びの場のデザインを目指すものである。対象は、川崎市内の教育支援センター(ゆうゆう広場)6箇所とフリースクール等10箇所の計16施設である。2024年4月から5月にかけて各施設に調査協力を問い合わせ、承諾を得た10施設に対して、6月から2025年1月にかけて施設視察および職員への聞き取り調査を実施し、音楽・美術・演劇・ダンス・詩などの芸術体験の実施状況について現状と課題を把握した。調査の結果、職員の資質により活動の充実度に差があること、予算・人材確保・活動場所の面で困難を抱えていること、大学等外部組織との連携へのニーズがあることが明らかになった。2025年2月には、調査結果を基に冬の庭での宝物探しによる千代紙・色箔を用いたコースター制作のワークショップを実施した。本プロジェクトは「地域の不登校支援ネットワーク」の連携プロジェクトとなる可能性を秘めている。

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

2024年4月～5月：

文部科学省の示す学びの多様化学校、川崎市教育委員会管轄の教育支援センター、不登校支援サイト「未来地図」に掲載のフリースクール等不登校支援施設・団体をリスト化し、計16施設に調査協力を依頼した。承諾を得た施設への訪問調査を開始した。

2024年6月～2025年1月：

「ゆうゆう広場(みゆき・さいわい・なかはら・たかつ・たかつ・たま・あさお)」6箇所、「川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん」「NPO教育活動総合サポートセンター」「小さなうち」「にじのはし(NPOレインボースクールかわさき)」を訪問し、施設見学と教職員への聞き取り調査を実施した。各施設における芸術体験の実施状況、使用教材、子どもたちの反応、課題等について情報収集を行った。

また、大学周辺の子どもたちの支援に詳しい上智大学の酒井朗先生に現状と芸術体験支援について相談した。川崎市には不登校特例校が無いとの助言を受け、参考事例として東京シューレ江戸川小学校・葛飾中学校へ視察に伺った。

2024年11月～12月：

視察と聞き取りで得た情報を元に、ワークショップの内容と場所を模索した。場所は、横長い市の中央に位置し、自然豊かな山にある川崎市民プラザの茶室「如庵」に決定した。内容は、非日常であり、学校では取り組めない題材として、金属箔を使ったコースターづくりを企画した。千代紙と箔貼りによる造形表現活動とすることで、伝統的な素材に触れながら自由な表現を楽しめるプログラムとした。

フライヤーおよび申し込みフォームを作成し、ワークショップ参加予定の不登校支援施設・団体の支援者と相談しながら、実施の詳細を決定した。

2025年2月：

2月の祝日にワークショップを実施した。【参加人数、参加施設、活動の様子などを記載】。ワークショップ後は参加者へのアンケートを実施し、芸術体験の効果や今後の支援のあり方について意見を収集した。

研究成果の概要（1000字以内・写真が複数ある場合は、600～800字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

本プロジェクトでは、川崎市内の不登校支援施設10箇所で実態訪問調査を実施し、調査結果を基にワークショップ実践を行った。

調査結果の主な知見

教育支援センター（ゆうゆう広場）では職員が可能な範囲で音楽や美術の活動を提供しているが、専門的指導者が不在の施設もあり系統的な芸術体験プログラムは実施されていない。一方で専門的職員がおらずとも芸術活動を行おうとする姿勢が見られ、施設側が芸術活動の価値を感じていることが窺えた。また、子どもたちには芸術活動に関心を示す者が多く、音楽・美術等に自主的に活動する子どもが一定数いることも明らかになった。

ワークショップ実践の成果

調査結果を基に子どもたちを募りワークショップを実施した。企画段階で支援者から参加する子どもの様子を丁寧にお聞きすることが重要と明らかになった。保護者の付き添いが必要な児童への対応として全家庭で保護者参加を可能とし、支援者にも体験していただくことで普段の様子と比較しワークショップの意義を実感していただいた。

事後アンケートでは、コースター制作の楽しさに加え、宝物探しやスケッチ、素材選び、お茶室でのお茶、お茶室や日本家屋・庭などの環境が心に残ったとの感想が寄せられた。ただ作るだけでなく、関連する様々な体験を通して造形活動がより豊かな経験となることが明らかになった。支援者からは「最初は泣いていた子が楽しいと言い始めスイッチが入った」「図工大嫌いな子が楽しそうでよかった」との報告があり、子どもからも「絵を描いたり切ったり意外と楽しいと思った」との声が聞かれた。

今後の展開

本プロジェクトの成果は不登校児童・生徒への芸術体験支援における「地域デザイン」の一つのモデルを提示するものである。このような活動は子どもの多様な学びの場を保障する上で重要な意義を持つため、今後は専門家による芸術体験を通じた不登校支援が可能となる方法を模索したい。また今回の調査ではフリースクール間の横のつながりや情報交換が必要とされていることが明らかになった。このことから今後は川崎市内の不登校支援施設における横のつながりを生む取り組みにも視野を広げていきたい。芸術体験を通じた不登校支援の継続的な実践と、地域の不登校支援ネットワークにおける大学の役割を明確化していくことが今後の課題である。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2022年4月～2023年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

中村仁美「庭で見つけた宝物～小高庵の冬～」ウェブサイト

<https://hitominakamura.jp/treasure-found-in-the-garden-winter-at-odaka-hermitage>

■箔貼りの様子



■小高庵の庭



■制作したコースター



■庭でのスケッチ



地域応援プロジェクト報告書

代表者氏名	根来 章子		
企画名	根来ゼミ「わっこ」公演「親子で楽しむふれあいタイム」		
実施日時	2024 年 11 月 10 日（日） 10:00～11:15	場所	和光大学ポプリホール鶴川 多目的室
入場料	無料	来場者数	26 人
出演者等	出演：2024 年度「保育表現演習」履修学生 11 名 指導：根来章子（現代人間学部准教授）、後藤紀子（本学名誉教授）		
プロジェクトの 概要 (400 字以内)	「保育表現演習」ゼミにおいて学生が高めてきた児童文化財の表現技術を生かし、地域の親子を対象とした公演を行った。家庭でもできる親子のふれ合い遊びの提案や、親子が共にリラックスして楽しめる時間を提供することで、地域の子育て支援に貢献することを目的とした。同時に、学生が子どもたちと相互的なやり取りを行いながら表現する経験を通して、保育における協同的かつ創造的な要素を学び取ることも目的として実施した。 親子のためのふれあい遊び（「バスにのって」「おふねはぎっちらこ」）やパネルシアター、フレームドラムを使った影絵の上演を行った。また、トーンチャイム・ミュージックベルの演奏後には、来場した子どもたちによる演奏体験コーナーを設け、参加した子どもたちが演奏を楽しんだ。さらに、ブラックライトを使ったパフォーマンスと参加型の遊びを実施した。		
プロジェクトの 成果 (500 字以内)	申し込み締切時点で定員を超える申し込みがあり、当日は 26 名の親子が来場された。学生が主導する様々な遊びを通して、親子が触れ合い、笑い合う姿が様々な場面で見られた。影絵等の鑑賞型のプログラムでは、子どもたちが思いがけない反応を示すことがあり、それを出演者と来場者が一つになって受け止め、会場が温かい雰囲気に包まれたことも印象的であった。出演した学生にとっても、子どもの感性の発露を間近で感じながら、柔軟な問いかけや応答を行うなど、学内では経験できない教育的な効果が得られたと考える。 さらに、大人のお客様が学生のパフォーマンスを好意的に受け止めて、言葉や反応を返してくださったことも、学生にとって大きな励ましと自信につながった。地域の子育て支援を担っていく保育者を志す学生にとって、大学から地域に目を向け、つながりを感じる貴重な経験となったと言える。		

その他	当日の様子は、添付の写真をご覧ください。
-----	----------------------



地域応援プロジェクト報告書

代表者氏名	大橋 さつき （現代人間学部人間科学科 教授）		
企画名	＜公開セミナー＞ 今、あらためて問う「集い遊ぶこと」の意味 第2弾 五月礼讃：響き合う身体と心		
実施日時	2024年5月5日（日・祝） 12：30～17：00	場所	新体育館パレストラ1階 ダンス演習室・ダンス練習室 4階エントランスホール
入場料	無料	来場者数	60人(1部2部合計)
出演者等	＜第1部＞ 【オープニングパフォーマンス】 向井善哉・中村順一（ドラム・パーカッション演奏） 大橋さつき（ダンス） 【報告・討議】 向井善哉・容子（保護者・誕生から現在までの我が子の育ちについて） 大橋さつき（幼少期のムーブメント教室でのかかわりから） 根立博（特別支援学校の学童期のかかわりから） 中村順一（現在までドラム指導の担当から） 小林芳文（総括） ＜第2部＞ 【公開プログラム】 恵濃志保（プログラムリーダー）		
プロジェクトの 概要 (400字以内)	第1部では、障害のある青年（向井善哉さん）を中心に、彼の育ちにかかわってきた者たちが集い討議を行った。オープニングパフォーマンスの後、「響き合う身体と心～よしやくんから教わったこと～」と題して、運動遊びを原点とした発達支援法である「ムーブメント教育・療法」や音楽演奏活動を通した報告を踏まえ、コミュニティの中で人々とのつながりを大切に育ってきた姿をふりかえりながら討議を行った。来場者を含めて活発な意見交換が行われた。 続いて、第2部では、「みんなで遊んでつくろう！ クリエイティブムーブメント『心音（こころね）』」と題した公開プログラムを実践した。これは、コロナ禍で、劇場等の室内施設での上演にも制限が続く中、本学の学生・卒業生と地域住民が里山公園の自然の中で発表したパフォーマンスをもとにリメイク版として構成された。当日の来場者も一緒に全員でパフォーマンスを創り上げていくことができた。		

プロジェクトの 成果 (500 字以内)	本セミナーは、アフターコロナの地域子育て支援のあり方について、共に語り合う場として設定された、和光大学地域応援プロジェクト：今、あらためて問う「集い遊ぶこと」の意味 ～ムーブメント教育・療法を活かした地域子育て支援の実践から～（2023 年 11 月 3 日開催）の続編として企画された。 参加者は、前回同様、保育、療育、地域子育て支援の関係者が多く、また、障がい当事者にフォーカスを当てた第 1 部の影響もあり、障がい児の保護者、親子の参加も複数あった。第 1 部では、長期に渡る成長の記録と共に貴重な話を聞くことができた等の感想が多く寄せられており、満足度が高かった。また第 2 部では、参加者の多くが生き生きと動き、かかわりを楽しんでいる様子が観られた。様々な立場の人たちが集い、遊び、表現し、一つのパフォーマンスをその場で創りあげる体験が感動的であったとの声が寄せられた。 コロナ禍で失われてきた「集い遊ぶこと」の意味を問い続けながら、さらに、今回は、「響き合う身体と心」をサブテーマにして、クリエイティブな遊びや表現活動に集う人々の間で起こることや、共振共鳴する身体・通じ合う心に焦点を当てた内容で実施することができた。
その他	





地域応援プロジェクト報告書

代表者氏名	大橋 さつき （現代人間学部人間科学科 教授）		
企画名	心音(こころね)プロジェクト 2024 ～ 触れて、混ざって、響き合う ～		
実施日時	2025 年 1 月 26 日（日） 2 月 8 日（土） 2 月 11 日（火祝） 12:30～16:00	場所	新体育館パレストラ 1 階 ダンス演習室・ダンス練習室
入場料	無料	来場者数	60 人（出演者以外）
出演者等	【出演者】 公募による市民（障がい児含む）14 名、学生 10 名 【スタッフ】 舞台監督：加藤健史（招聘者）／ 音響：飯島央生（招聘者）／ 照明：兼子龍海（卒業生）／ 撮影：野中浩一（人間科学科 教授）／ 受付・誘導：学生 5 名 ／ 総括：大橋さつき		
プロジェクトの 概要 (400 字以内)	本プロジェクトは、2016～2017 年度地域連携研究プロジェクト「共生・共創をめざした創造的身体表現遊びの実践」としてスタートした実践研究「心音（こころね）プロジェクト」の流れを継ぐ企画である。「遊んでつくる、舞台でも遊ぶ」をモットーに、年齢や障害や経験等の違いを超え様々な人たちが集い、ダンスやアート、太鼓等の表現遊びのワークショップを楽しみ、それらを活かして舞台発表という新しい「場」を生み出すことを目的としたプロジェクトで、コロナ禍で中断されていたが、屋外で発表した 2023 年度の取り組みに続いて、本企画が計画された。 障がい児を含む市民 14 名と学生 10 名が出演者として集い、パフォーマンスの創作・発表に挑んだ。第 1 回、第 2 回は、光や音を活用した表現遊びを楽しみ、自由なかかわりの中で作品創作を行った。第 3 回は、60 名の観客を前に舞台発表を行い、さらに観客も巻き込んだ参加型の即興パフォーマンスを実現し好評を得た。		

プロジェクトの 成果 (500 字以内)	本プロジェクトは、2024 年 5 月開催の「地域応援プロジェクト〈公開セミナー〉 今、あらためて問う『集い遊ぶこと』の意味 第 2 弾」において、過去の「心音プロジェクト」の報告と簡易版のプログラムの提供を受け、同様の活動を求める声が集まり企画された。よって、親子の出演者（5 歳～50 代、障がい児含む）のモチベーションが高く予めイメージを共有できていたことが、成功の要因であったと考えられる。 発表日の集客についても、関係者を通したチラシの事前配布で当初の定員（40 名）に予約が達し、関心の高さがうかがえた。増席し、出演者の家族・知人を中心に、保育士、地域子育て支援関係者、障がい児支援関係者等、60 名の観客を迎えた。中に障がい児とその家族の来場が数組あったが、他者の発表を真剣に受けとめ、さらには参加型のパフォーマンスでは活き活きとかかわり表現を楽しむ姿が見られ、保護者から喜びの感想が寄せられた。出演者として参加する障がい児はもちろん、多動や感覚過敏等の特性から、イベントへの参加に様々な制限を受けている子どもたちを観客として迎えることにも、インクルーシブな場づくりを目指す本プロジェクトの意義があると実感した。
その他	

<記録写真>



写真1:舞台作品発表の様子



写真2:観客を巻き込んで即興パフォーマンスを楽しむ



写真3:ビニールパラシュートでファンタジックなフィナーレ

地域応援プロジェクト報告書

代表者氏名	山口 理沙		
企画名	絵本学の学びを通した読み聞かせの専門性の重層化 —物語を「物語ること」を通して地域交流の取り組みとして—		
実施日時	2025 年 3 月 6 日～31 日	場所	町田市立鶴川駅前図書館
入場料	無料	来場者数	不特定多数のためカウントしていない
出演者等	和光大学「保育学」・「子どもとことば」受講生作品展示		
内容	本企画は、絵本の学びを地域に還元する保育学生の活動である。2023 年度より、町田市立鶴川駅前図書館より要請を受け、絵本の POP 展示と、図書館まつり（2024 年 3 月 2 日）に山口ゼミ及び保育コースの有志学生とともに読み聞かせに参加した。2024 年度も継続して地域の子育て世代にむけた絵本の紹介と実演を依頼された（なお、2024 年度はプロジェクト申請以前に啓文堂鶴川店での絵本の POP 展示と、町田市立鶴川図書館での読み聞かせを行った）。プロジェクトにより、町田市立鶴川駅前図書館での読み聞かせと絵本の普及活動が叶った。		

実績・効果	2024 年度当初の予定では、町田鶴川駅前図書館における絵本の POP 展示と、図書館まつりの参加予定であったが、館内システムの入替えの影響により、まつりの中止がプロジェクト受理以降に図書館より通達があった。そのため、絵本の POP 展示のみ今年度は行うこととなった。和光大学保育コースの山口ゼミの学生が、展示レイアウトと装飾を担った。事前に壁面装飾の製作を行い、会期中の巡回、撤収までを学生が担った。一般に向けた展示を考えることは、学生が、地域において子育て世代への絵本を通したメッセージを紡ぐ契機となった。また、当初は保育学生に焦点をあてた活動であったが、保育コース以外の受講生からも積極的な参加が見られた。専攻を越えて、学際的に保育学に触れる機会を今後も模索したい。
その他	○和光大学 HP にて掲載いただいた活動報告 https://www.wako.ac.jp/news/2025/03/36331.html ○予算執行 https://docs.google.com/document/d/1WX8v766fUs8YRv17gKWMTWJPIvXkXAGKPa0cvCGZgHo/edit?usp=sharing ○展示風景 https://drive.google.com/drive/folders/1NY1D5sRU9ojqJs2Ff1ma-TDe3bQjGNzh?usp=sharing

地域応援プロジェクト報告書

代表者氏名	加藤 巖		
企画名	アジア・フェスタ in WAKO 2024		
実施日時	2024 年 10 月 7 日-12 日	場所	オンライン講座および 和光大学キャンパス
入場料	無料 ・有料（ 円）	来場者数	181 人（延べ数）
出演者等	10/07 講演『「ネパール人のカレー屋」はなぜ多いのか？』 講師 室橋裕和さん（ライター／『カレー移民の謎』集英社） 10/08 講演『島へ移住！～いろいろな島いろいろな暮らし』 講師：武山泰士さん（シェフ／父島に 18 年間移住経験） 講師：野々山富雄さん（ネイチャーガイド／屋久島移住 30 年） 講師：日比野淳平さん（染色業・地域おこし協力隊／隠岐の島） 講師：芳地直美さん（ライター・看護師／和光大卒・小豆島） 10/09 講演『アイヌとして生きるということ』 講師：原田公久枝さん（アイヌ文化継承者） 10/10 講演『伝統文化を用いる防災教育』＊インドネシア中継 講師：バンバン・ルディアントさん（本学教授／防災教育など） 講師：マスツリンさん（インドネシア宗教系 NPO 代表） 10/11 講演『ロシアのウクライナ侵略戦争の裏側』＊ウクライナ中継 講師：田浦弘芳さん（商社マン／ロシアやウクライナ等に駐在） 10/12 対面交流会『一つ釜の飯交流会』 世話人：関根秀樹さん（本学非常勤講師／縄文文化研究など）		
プロジェクトの 概要 (400 字以内)	2003 年以来、アジア・フェスタは本学の専任教員と非常勤講師の有志が主体となり、地域の人々を「アジア」を軸に有機的につなげることを目指して開催してきた。これまでアジアの食や音楽、舞踊、武術などを紹介する一方、講演会や映画上映会、各種の展示会などを実施した。 2020 年にはコロナ禍により中止となったが、2021 年はオンライン講座として再開した。すると、近隣地域はもちろんのこと、内外の遠隔地から受講者を募ることができた。また、海外からの中継講座も増えた。 さらに、参加者のアンケートで要望が多かったことから、地域の方々に直接参加していただけるようフェスタの一部を対面型にした。とくに最終日は各講師と直接話すことができる交流の場（食体験を含む）として交流会を開催した。在学生らの参加もあった。 本事業は本学の誇るべき地域貢献事業と考えている。		

プロジェクトの 成果 (500 字以内)	21 回目のアジア・フェスタは、日本の地域の暮らしのあり方に焦点をあてたものとなった。まず、10/7 の講座では外国人コミュニティと地域住民との関わり方について、最近のネパール移民の増加から考えた。なぜ、ネパール人のカレー屋が増えているのか。我々は移民の抱える背景を知ることで、外国人コミュニティと良好な隣人関係を築くことができるはずである。 ついで、10/8 の講座では、昨今話題の多拠点生活を「島への移住」を通して考えた。4 人の講師から、様々な島での暮らしを紹介いただいた。多くの受講者が島の暮らしに魅力を感じ、多拠点生活の可能性を実感したと思う。10/9 講座ではアイヌ文化を継承する講師から、アイヌの人々の置かれた厳しい社会環境について教わった。私たちは、民族や文化の違いを「地域の財産」として捉え、すべての人が互いに認め合う多文化共生社会の実現に取り組む必要があると深く考えさせられた。 10/10 と 10/11 は防災と平和を考える講座となった。普遍的かつ、最近社会全体で議論する機運が高まる課題で貴重な講座であった。 今回、川崎市教育委員会や町田市教育委員会、町田市文化・国際交流財団、川崎市国際交流協会から後援などをいただいた。
その他	